

フーゴー・レッチャー

『Muff-Sein 〈嫌な気分であるということ〉』

訳 市川 優奈

いずれの言語にも翻訳できない言葉が存在する。それらは言語の心髄に通じる扉を開く鍵であり、それらを話すそれぞれの民族の心髄に通じる鍵でもある。

例をあげると、フランス語の ^{エスプリ}esprit が才知を表し、ドイツ語圏の話者が esprit を必ずしも同様に備えていると言えず、また備えているというのは胡散臭いのかもしれないということを我々は心得ている。ドイツ語の Geist 「才知」はより奥深い、あるいは高度であり、どちらかというと Weltgeist 「世界精神」に近いものである。そのためかつて世界精神はドイツ語話者にしか理解できない概念であった。

そしてイギリス人における common sense も gesunder Menschenverstand 「健全な常識」では伝えきれない。common sense には市民的感觉がある。英国の市民的常識においては次のことが明白だ。それは社会が取り決めなしにやっていけはしないということ。そしてすべての取り決めには、風変わりな捌け口が必要であるということだ。

あるいはアメリカ人の deal だ。deal は、その言葉の意味として政治と同様に貿易を、裏取引と同様にトランプのカードの分配を含んでいる。それと同時に公然たる政治と貿易の組み合わせ、イデオロギー、あるいはビジネスをも含んでいるのだ。それ故にカードの分配に注意するだけでなく、カードの切り方にも注意しなければならない。

これらのような言葉は決して全てのニュアンスを翻訳できるわけではない。場合によっては、スペイン語の *desenvoltura* を *Lässigkeit* 「能天気」や *Ungeniertheit* 「明け透け」に置き換えるのではなく、そのまま使用の方がいいことがある。ポルトガル語の *saudade* においても「悲劇的な憧憬と同時に、この上なく幸せである。」という意味としてそのまま *saudade* を使用する。

これらのような単語の一覧は民族や言語と同じくらい多様である。もちろん我々スイス人にも民族の心髄へと通じる翻訳できない言葉が存在する。スイスドイツ語における民衆の心を表す言葉として、例をあげるならば *muff* という言葉がある。

もちろん言葉の意味を一旦部分的に翻訳することはできる。独辞書ではこの場合 *muff* の説明として、*übelgelaunt* 「機嫌が悪い」と記される。しかし我々は常に *muff* ではない。何故なら単に機嫌が悪くなったわけではなく、それは言わずもがな、左足から起床してしまった日の不運のようなものではないからだ。¹

〈嫌な気分であるということ〉の人相を知ろうとするときには、ある始業前の朝に最も適切で簡単に済ませられる手段として、路面電車やバスまたは鉄道を利用すると良い。固く閉ざされた口々は毎日毎日の我々スイス人の嫌な気分を反映した鏡であるからだ。

ある表面的な観察者ならば、人々が仕事に行かなければならないから嫌な気分であると考えられるかもしれない。だがしかしそれは間違いである。なぜならスイス人は労働時間の短縮に対し民主的な採決の中で反対した唯一の国民であったからだ。スイス人が公共交通機関を使用している時、外国人労働者の同時刻の通勤態度を対照として理解し比較してみた場合、外国人労働者はのんきにしているか笑っている。

だから嫌な気分の顔をしたスイス人は、嫌な気分の視線を外国人労働者に向ける。つまり、今日一日何が起きるのかわからないのでのんきに過ごしているべきではないということだ。そもそも外国人労働者がスイスに永住した

いのであれば順応しなければならない。そしてそれならば笑顔を失うだろう。

しかし、Muff-Sein ^{ムフ} ^{ザイン} 〈嫌な気分であるということ〉というのは機嫌に関係していない。機嫌は天気のように変わりやすい。だがたとえ風や大気圧でも我々の〈嫌な気分であるということ〉を変えることはできない。空が青い時、我々は嫌な気分になる。なぜならこのような素晴らしい空がずっと続くものではなく、そもそも今日の空の青さは昔の青さより青くないからである。そして空が曇っていて、雨が降りそうな時、我々は正当な理由で嫌な気分になる。

だが、我々の〈嫌な気分であるということ〉はその場の気象学によって定められていない。それはある事象の結果ではないのだ。我々の〈嫌な気分であるということ〉には原則的な様子がある。我々は原則として嫌な気分なのだ。

その点においては、〈嫌な気分であるということ〉は次のことと我々の嫌な気分を関連付けることはできる。それは譲渡できない民主主義の完全な同権にケチをつけること。家やレストランであろうと自身の政治への怒りをもって机を叩くこと。文句を言いながら我々が他者や自身の評価を行うこと。どこまでがそれぞれの縄張りであって表現する手段であるのかを明確に示すことだ。

そしてその点では、〈嫌な気分であるということ〉はまるで我々の厳粛な怒りであって、歴史的であり父親から受け継いだ全てである。我々は厳粛な怒りを感じた時、家に軍用銃を保管していることを誇りに思い、好んで鉾槍やモーニングスター²を手にするのだ。

だがしかし〈嫌な気分であるということ〉は必ずしも大々的に表現する必要のあるものではない。〈嫌な気分であるということ〉は大衆の大多数がmuffであることである。そして国において沈黙している人々でもなく、水辺に住み、濁るか否か³ということなのだ。〈嫌な気分であるということ〉はある精神的予防措置なのである。

我々は与えられた課題にまじめに取り組み、整理された日々を過ごした

い。しかし人生は規則的ではないということを、身をもって知らなければならぬ。

例えば、ほこりを払う主婦は既に知っている。ほこりが繰り返し家具を覆い、何度もそれを見るに違いないと。このような主婦の経験は、統治する際に決してほこりを払いきることなど出来ない国政を担う政治家も共有しているだろう。家庭ですら難しいことであるというのに、どうやって国政において祖国を永遠に輝かせるというのか。我々は人生の不十分さもすべての人間の存在における不完全さも知っている。人々がいくら対応をし、その上準備を行っていても、突然予期せぬことが起こると今までの全てが変わるのだ。

それ故に我々は先を見据える。嫌な気分であることによって備えているのだ。

嫌な気分であるということ、それはある勇気の形であり、不機嫌さを通して世界に耐える予防措置といった勇敢さである。何人かが嫌な気分であるとみなしていることは、実際にはそれ以上のことである。それによって我々はスイス人らしく妥協し、運命を受け入れ、運命による導きに助けを求める。我々は用意ができています。それは前もって少しだけ苦しんでおくことであり、大きな苦しみに見舞われないためのものである。それ故に我々はとりあえず怒っておくか、失望しておく。つまり我々は計算するだけではなく、計算が合わないことも覚悟している。それでは余りが出てしまうが、我々はその余りが悪くないこと、つまり道を踏み外さないことを望んでいるのだ。

故に我々は逸脱したもの、秩序に当てはまらないものを積極的に探している。その観点では我々は日常にも、世界の歴史にもまだ一度も失望していない。

我々は処理できない何かに出くわす時、整理すべき何かを発見する時、そしてそれを遮る納得できないことを確認する時に、我々の中にあの伝統芸能が有名になりヨーデルへと変化した歓声がこみあげ、変わらぬアルプスの夕焼けのように我々の目が輝く。それはつまり「我々がそう言った通り」で「我々はそれを前から知っている」のだ。

それは我々の不機嫌な表情が和らぐ時である。その時顔にはちょっとした朗らかさが現れる。それはきつと幸福を意味するものではない。しかし我々の気持ちが満足を得た状況に近くなったことを意味する。我々は理由なく muff になったわけではないのだ。

そのような和らいだ時が長く続くことはなく、そして続かない方がよいことは自明である。しかし我々はこのような状況を経験するたび強くなる。すべての〈嫌な気分であるということ〉の覚悟を引き受け、経験を糧にして生活における不当な仕打ちに備えている。それと同時に、希望を持って我々の〈嫌な気分であるということ〉の喜びを感じられるような一瞬の経験は正しいのだ、と確認できることを探しているのだ。

Hugo Loetscher, "Über das Muff-Sein", S. 147-152, in: ders., Der Waschküchenschlüssel, oder Was - wenn Gott Schweizer wäre, Zürich: Diogenes, 1988, (detebe 21633)

注

- 1 ベッドから降りる際に左足から降りるとその日一日不運になるという欧米の迷信。
- 2 鋭い突起が星の光のように突き出た打撃用武器の一種。スイスにおける伝統的な武器でもある。
- 3 湖などの水が澄んでいることはなく、濁っているため、普通は住む場所には当たらない。つまり虫を殺すことすらできない悪いことのできない人間である。という意味の慣用語。